

相關的思辨の基本分析

小 笠 原 秀 實

有機體と相關々係

一

すべて有機體は相關々係に於て説明される。従つてその分析は、相關々係を分析することになる。かやうにしてこゝに特に相關々係なるものの性質が明かにされなければならない。

相關々係は數個の要素が相互的に影響し合ふことであり、その相互影響の結果が、一つの全體的なるものを構成することである。この全體的者なるものは、有機體の場合、要素そのものとは質の異つたものとして認識される。

二

このことは又逆に有機體全體を部分に抽象して考察することであり、この場合、相關々係と云ふ一つの關係が見出されると云ふことにもなるであらう。例へば我々の生命現象は、心臓、肺臓、腦髓その他の相關的活動の結果であると考へられるのであるし、又かゝる相關活動の結果が生命現象

となつてゐるとも云ふことが出来る。

三

相關々係は、二重若しくは數重の因果が絡み合つてゐると云ふことである。即ちAとBとの相關々係は、AがBの原因であると同時に、BがAの原因であることである。石が地上に向つて動くと同時に、地球が石に向つて動くことである。心臟が肺臓を養つてゐると同時に、肺臓が心臟を養ふ。

四

「石が地上に落ちた」と云ふ表現は、一面的ではあるが正しい認識ではないか。それは、地球が少しも石へ向つて動かないのに、石のみが地球へ動いたと考へる限り誤謬である。

然しさうした明白な誤謬にも係はらず、我々は今尙「石が地上に落ちた」と云ふ表現を守り、各の場合、「地球が石に接近したと同時に」と云ふ相關の一つの命題を省いてゐる。そしてそれが實踐の場合、何の障害ともなつてゐないのは何う云ふ理由であるか。それは石と地球との體積の相違よりして、地球が石に接近するのは微小であり、實踐的に何の障害もなく、又理論そのものの正確を求むる時の外、換言するならば、理論の爲めの理論を學ぶ時の外、考慮に入れる必要がない程のものだからである。

このことは、相關々係の含む多くの因果の中、その因果のあまりに微弱な影響しか含んでゐない場合には、思考の經濟として省略することが出來ると云ふ歸結を基礎付ける。

五

相關的考察は、因果の一面的考察の誤謬を救ふのである。然しそれは、明白に識別され、實踐的に誤謬を含まない命題をも、複合と晦澁と神秘と懷疑と、そしてその結果素朴獨斷論さへも敢てしない盲目的ドグマを作り上げる危険を孕む。

要は、一面的因果考察に依るべき場合にはそれに依り、相關的複合を考慮に入れねばならぬ場合にはそれに依るべきである。推理作用に向つて、「目つぶし」を惹き起すやうな相關的考察方法は避けられるべきである。

六

全身的に有機々能を壞されてゐる一人の病人があるとする。彼の胃腑は衰弱して食物を受取らない。又彼の肺は甚だ多く浸蝕されて居り、その心臓はつゞく高脈の爲めに著しく疲勞してゐる。そして又彼の視力聴力はもとより、すべての筋肉は殆んで疲弊して動くことすらも出來ない。治療を醫師に諮つたとする。醫師は各部を検査し、全身何れの機能もみな疲弊して居り、その關係は相關的であることを説明したとする。彼は云ふであらう、胃の衰弱が營養不良となり、それに依つて肺

の微菌は活潑になり、又その分泌する毒素に依つて食欲を抑制する。この關係は相關的である爲めに、どこからも手をつけることが出来ない。かうした相關的認識は、この場合何の意味をも持たぬ。然し眞の醫師はかゝる相關的複合現象に對して、何が最も重要な作用を及ぼしてゐるかを考察するであらう。そして患者の體力を考慮に入れながら、根本原因なるものの除去に努力を向けるであらう。即ち應急の手あてをしながら、病源の治癒を企てるであらう。この場合、彼は一面的な因果的考察に依つて解決しようとするのである。複合化そのものである相關的考察は、結局何ものをも持ち來たさぬであらう。

七

カントは關係の範疇を、(一)實體性、(二)因果性、(三)相依性の三に區分してゐる。實體性は固定せる實體が、固定せざる多くの性質を持つ關係を規定せるものである。「机が黒い」場合、机は變らない實體であるが、黒い色は變り得る。赤く塗れば赤くなり、青く塗れば青くなる。云はゞ固定せるものと、變移すべきものとの關係であり、固定せるものに變移する多くの性質が從屬してゐると云ふ關係状態である。因果は原因が結果に移る關係で全く動的である。それは原因が結果になることを一義的に規定するものであつて、同時に結果が原因になることを規定してはゐない。相依性は原因が結果となると共に結果が原因となる。云はゞ因果の二重交叉である。

カントの相依性の範疇

八

こゝでカントの範疇論の一節が讀まれるべきである。(K. d. r. V., Elem. II. Th. I Abh. I. Buch I. Hauptst. 3. Absch. §11. 邦譯・一九二頁)

「注意第一。悟性概念の四綱を包括してゐるこの表は、先づ二部門に分れる。前者は直觀（經驗的ならびに純粹）の對象に、後者は此らの對象の存在（對象相互の關係もしくは對象の悟性に對する關係に於ける）に關係する。

前の部門を余は數學的範疇と名づけ、後の部門を力學的範疇と云ふ。表に見る如く前者は相依を持たぬのに、後者にはそれがある。實際この區別は悟性の本性にその基礎を有するに相違ない。注意第二。各綱の範疇の數が、いづれも一樣に三であるといふことはまた我々の考察を促すことである。何故といふに、概念による先天的分類には普通すべて二分法が用ゐられねばならぬから。なほ又第三の範疇がいづれもその綱の第一と第二との結合に依つて生ずることも注意されねばならぬ。

すなはち總體性は單一性として見做されたる數多性に他ならぬ。制限性は否定性と結付けられたる實在性に他ならぬ。相互性は相互に限定し合ふ實體の因果性である。終りに必然性は可能性そ

のものによつて與へられたる存在性に他ならぬ。といつてもそれだから第三の範疇は純粹悟性の基礎概念ではなくして派生的概念であると考へられてはならない。何となれば第三概念をうるためになされたる第一概念と第二概念との結合には、第一、第二の二概念に於てなされる悟性活動とは同様ならざる特殊な悟性活動を必要とするからである。例へば（總體性の範疇であるところの）數の概念は、數多性と單一性との概念があつても必ずしも可能ではない（例之、「無限的」の表象に於ける如く）。また原因の概念と實體のそれとを結びつけることから直ちに作用、詳しくいへば如何にして或る實體が或る他の實體に於ける或ものの原因となり得るかば理解せられない。してみればそれには或る特殊な悟性活動を要することが分る。範疇の他の類に於てもそれと同様である。

注意第三。範疇のうちたゞ一つ即ち第三綱に屬する相互性と判斷機能の表に於てこれに對應するところの選言的判斷との一致は、他の範疇とそれに對應する判斷との一致に於けるほど明白ではない。

この一致を確認するためには、次の點に注目されねばならぬ。――凡ての選言的判斷に於てその範疇（即ち判斷中にふくまるゝ全量）は部分（下位概念）に分れたる全體として考へられる、又そのうちのいづれの概念も他の概念のもとに包攝されることは出来ぬ故に、相互に従屬的ではなくして

對立的に従つて一つの系統に於けるが如く一方的ではなくして却つて一の集合體に於けるが如く相互に限定し合ふものとして考へられる（一の選言肢が定立せらるれば他の肢は排除せられる、逆も成立する）。

さてこれに似た連結が、物の全體に於て考へられる、何故といふに結果としての或ものはその原因としての或る他のものに從屬せしめられないで、却つて限定に關する原因として同時に相互的に他のものに對立せしめられるから、（例之、一の物體に於てさうである、その部分は相互に牽引し、しかもまた反撥する）。此の如き連結は原因と結果（理由と歸結）との單なる關係に於て見出さるゝものとは全く別種のものである、後者に於ては歸結がまた交互的に理由を限定するといふことはなく従つてまたこれと合して一の全體を形成するといふこともない（造物主と世界との關係の如くに）。悟性が分たれ概念の全範圍を表象する場合にとる仕方は或ものを可分的として考へる時のそれと同じである。前者に於て選言肢が相互に排斥しながらしかも一の全範圍に結合せられてゐると同じやうに、悟性もまた後者の各部分を（實體として）それぞれ他のものからは獨立な存在を有しながら、しかも一の全體に結合されたるものとして表象するのである。」

さてこれらの考は、如何なる問題を含んでゐるのであるか。

九

それは次の諸問題を含んでゐる。

(一)、悟性概念の四綱の中、量と質とは數學的範疇であり、それは相依の關係を持たぬが、關係と様相とは相依關係を含むと云ふことの意味、並びにその可否。

(二)、各綱範疇の第三のものが前二者の結合であること、並びにそれは第一、第二に比して特殊活動であること、換言するならばヘーゲルの意味に於ける辯證性を持つと云ふこと、並びにその可否。

(三)、相互關係は對立關係であり、「獨立な存在を有しながらしかも一の全體に結合されるもの」であること、並びにその可否。

(四)、判斷論から悟性の範疇を誘導することの可否。

相關性の考察にあたつて、これら四者共に取り上げられるべき問題であるが、就中第三の問題が中心であり、他はそれに關聯して考察されるであらう。

10

最初に「總體性(全體性)は單一性として見做されたる數多性に他ならぬ」(So ist die Allheit [Totalität] nichts Anders als die Vielheit als Einheit betrachtet.)が考察されるべきである。

この定立は甚だ明瞭であり、辯證的契機が最も理解し易い仕方に於て説明されてゐると云つて差

支ない。約言するならば、一と多との辯證的綜合は全である。そは全は多を含む一だからである。然しこの代表的に把握し易いこの綜合關係に、言葉そのものより來る一つの混同と誤謬とが含まれ勝ちである。云はゞベーコンの「市場の偶像」(idola fori)に該當すべき或るものが含まれてゐるやうである。理由は次のやうである。

一は多に對立する。この對立は對當關係に於て同一段階にある。然し全はすでにこの同一段階にはゐない筈である。全は對立せる一も、對立せる多も包括する。そしてそれは確かに一つではあるが、一多對立に於ける一の意味ではない。量の範疇表は *Einheit* としてこの一を提示し *Vielheit* と對峙させてゐる。そしてこの綜合に於ても、同じ *Einheit* なる語に依り *Vielheit* als *Einheit* としてゐる。「單一性とし」ての單一性は、與へられたる、又對峙的な單一性ではなく、別の外延と、別の内包とを持つものである。たゞ言葉が同じ「單一性」と云ふ形を備へてゐるに過ぎない。約言するならば、全は一ではあるが、多に對峙せる一ではない。外延内容共に別のものであつて、單に語の同一であり、従つて甚だ誤謬性を包む類似性をさへ持つ。即ち全は形式的に一だからである。更に全は外部よりすれば一、内部よりすれば多、そして外部より見られたる一は、多の一つとしての一ではない。かやうにして一と多との結合(カント用語法によれば、第一と第二との結合)が、全を構成すると云ふ理は成立しないのである。

結局、全は一と多との結合、若しくは綜合ではなく、多の總括されたるものが全なのである。こゝでは *Einheit* は單一の意味ではなく、統一の意味である。單一と統一との意味を混同する詭辯的錯誤性が、こゝに顯はれてゐる辯證性なのである。

一つの概念の成立する段階の必然性を液體化することに依つて、この種の辯證的誤謬が誘導されることを注意すべきである。

一

かくて全は多の統一されたものであり、又單一化されたものであるが、單一そのものではない。單一そのものは内から見ても一であり、外から見ても一である。それは内部に部分を持たぬ。然し全は部分を持つ一である。少くとも部分の統一として、又部分に關係された考へ方に於て成立する一である。

二

次に考察されるべきものは、注意第三の終の部分である「結果としての或ものはその原因としての或る他のものに從屬せしめられないで、却つて限定に關する原因として同時に相互的に他のものに對立せしめられる」[*da nicht eines, als Wirkung, dem andern, als Ursache seines Daseins, untergeordnet, sondern zugleich und wechselseitig als Ursache in Ansehung der Bestimmung der*

andern beigeordnet wird.]と云ふ考である。

これは相互性、又は相關性の規定である。即ち相關性は一重の因果ではなく、果が同時に因を規定すると云ふ二重の因果である。換言するならば二つ以上の因果が交叉する状態である。

相關性の内面分析

一三

そこで最も單純な場合として二つの因果が交叉する様々な場合を識別して見る必要がある。それは交叉する二つの因果の強弱に關係して區分されるべきである。

(一)、同質の二つの因果が、反對の方向に於て同じ強さを以て相互に關係し合ふ場合。

(二)、同質にして反對の方向にある二つの因果の一方が、他のものよりも強い場合。

(三)、(二)の場合に於て、一方の強さが壓倒的であつて、その限界に達してゐる場合。

以上三つの場合である。

一四

この三者の中、第三のものは、極限に於て一方的な因果性に歸着される。それは交叉する二つの因果の中、一方が壓倒的であり、全體そのものの性質もこれが決定するのであり、又無限の一方的因果として、全體性をも喪失するからである。

第一の場合、即ち同質にして反對の方向にある二つの因果が同じ強さに於て作用し合ふ場合、この場合に於ては、二つの因果は力に於て均衡し、そこに何の動きもなく、靜止の状態である。

若しこの均衡が完全そのものであるならば、それは單一そのものになつて了ふ。何故ならば靜止均衡が永續的であるならば、部分への分割が企圖されないからである。従つてそれは全體性の意味を喪失し、單一そのものとなる。即ちカントに依るならば「或ものを可分的として」(ein Ding als theilbar)考へることが出来ない状態である。

一五

可分として考へ得られない相關的結合は、最早不可分の一體であり、エレアの有の性質を持ち、たゞ一である。

それは一實體であり、屬性との對立をさへ容認されない獨立存在である。

一六

二力の均衡状態として考へられる相關的全體は、これほど緊密であり、これほど合一的であつてはならぬ。さうである限り、「可分的として考へ」られる限りに於ける二力の均衡である。従つて又全體なる概念も、部分への不可分状態ではなく、可分的状態に置かれたる單一者なのである。單一としての單一ではないのである。

かりに、もたれ合つて立つてゐる二つの柱を想像せよ。それは同長同量で二等邊三角を構成し、頂點の角が三十度であると假定せよ。この二つの柱は相互性に於て、互ひに支柱となることに依つて、その靜止を維持し、又この合掌の全體性を保持してゐる。この靜止、この釣合が永遠であつて、如何なる變化に遭遇するとも變らないとするならば、これは不可分の全體を構成するであらう。然し何かの變動に依り、一方が他方を壓し、二等邊が不等邊化し、頂角が増加することになるとするならば、こゝにこの變化を契機として二つの部分に分割することが出来る。そしてこゝに相關々係の意味が明瞭にされる。

又この二柱の頂點が「つなぎ」に依つて緊密に結合させられ、たとひ他に何う云ふ變化が起らうとも、決してそれら二つのものの關係を壊さないとするならば、二柱は寧ろ一柱の曲れるものであり、又曲れる一柱であつて、常に單一である。又それを全體と呼ぶならば、部分を含まざる全體であつて、畢竟單一そのものである。

かやうにして二力の完全なる相關的均衡なる第一の場合は、その極限に於て單一である。従つてそれは全體性の意味をさへ失ふ。かくて第一の場合は、相關性なる概念を成立させる爲に、第二の場合に移つて行かなければならぬであらう。

一八

相關性は可分性を認めなければ成立しない。

可分は相違性に依つて成立する。何の相違も存しないところに、可分の成立はない。殊に全體に對する部分對立としての可分は、何かの相違性に依つて刺衝されねばならぬ。この相違性、可分性が基礎となり、部分が成立し、部分間の因果が二重に交叉し、その一方の因果が、他よりも強い時、弱い因果は強いものに從屬される。相關性は、從屬的でないこと、即ち *unterordnen* されないことがカントの規定である。然し如何なる從屬性もないとするならば、そして又全く分離別立のものでないとするならば、第一の場合のやうに不可分の單一者となるべきである。すでに相關は可分過程に於て成立することになつてゐる。可分は相違性を豫想する。この相違性が量的に規定される場合、強弱を持つべきであり、強弱の對立に於て、弱きものは從屬的たるべきである。

一九

こゝで又注意第二の「相互性は相互に限定し合ふ實體の因果である」(Die Gemeinschaft ist die Causalität einer Substanz in Bestimmung der andern wechselseitig.) が考察されるべきである。

相互性は因果性の交叉である。それは範疇表より云へば實體性と因果性との綜合である。「相互性(能動者と受動者との交互作用)」(der Gemeinschaft[Wechselwirkung zwischen dem Handelnden

und Leidenden)」として提示されてゐる。従つて相互性は、部分間には因果的動きと依存性を認め、全體としては實體的不動を認めることになる。それは恰も一と多が全に於て綜合されたと同じやうな辯證契機である。

實體性は不動不變を表示する。因果性は動を實質とする。そして内部に動を含み、全體として不動を含む點に於て、それは因果性と實體性との綜合である。従つて全體としての不動性は、内部に動を持つことに依つて、實體そのものとは別であり、又内部に於ける動は、全體として不動たる點に於て、因果性と相違するのである。

二〇

相互性が相互性である爲には、動と可分とを豫想する。動は均衡の喪失を表示する。従つて相互性の内部は運動そのものであり、因果そのものであり、依存性そのものである。全體としてその均衡は保たれ得るにしても、その内部にはかゝる因果的運動性を含む。さうである限り、部分に於ける與奪關係は複雑である。かくて強弱二種の因果が交叉する場合弱者の從屬が當然生起するのである。

例へば實體性の原理として「實體持續の原則」が考へられる。曰く「現象の一切變易中に於て實體は持續し、その量は自然中に於ては増減せず」と。現象全體としての實體、云はゞエネルギーの

量は増減しないことである。全現象は全體量としては不動である。然し部分間の「とり」「やり」にはたえざる變化がある。即ち部分量の間には與奪があり、強い動力は、弱い動力をその方向へ從屬させる。二の力と一の力とが反對に働けば、二は一を自分の方向にかへる。

二

このことは研究の對象が全體であるか、部分であるかの關心に依つて、さまざまの規定を持つ。全體にも種々の段階がある。カントの「實體持續の原則」のやうに現象一切を包含する全體もあるであらう。又その部分に過ぎない人間一切の現象も、全體と考へられる場合があるであらう。又人間の一部分である團體の歴史現象一切が全體と考へられる場合もあるであらう。更により小さい全體は幾重にも規定することが出来る。かゝる場合、全體の不動性、全體の單一性よりも、それら全體中の部分間の與奪關係に研究の關心が置かれる。カントの相互性の範疇に關係する「交互作用或は交互性の法則に従へる共在の原則」、即ち「凡ての實體は空間に於て同時に知覺され得る限り一般的交互作用をなす」の場合に於て、かゝる交互作用の均衡狀態のみが研究の關心事たるのではなく、それら作用間の強弱、與奪關係が考究されたい場合がある。學的探究の多くの場合は寧ろこのことにある。このことは相互的に關係し合つてゐる一見渾一體を二つ以上の因果に分析し、各の因果の必然を知ると共にそれらの綜合、並びに相殺關係を規定することであると云ふことに歸着する。

二二

與へられたる相互作用は、相互作用として取り上げられる限り、全一な不可分單一體ではなく、可分であり、相違的であり、分析可能的である。従つてかゝる作用は、二重又はそれ以上の因果に分解し、各因果の必然性を考究し、必然性の高度にあるものに向つて、從屬關係を規定することが方法的である。

實質原因と相關的同意語反復

二三

一つの現象の成立は、多くの因果の交叉である。これらの因果を分析することに依つて、何れがさうその現象に向つて本質的であるかを發見することが出来るであらう。云はゞその現象が成立する爲に、なくてはならぬ原因、かりに實質原因とも名けらるゝものを判別し、このものを基本として、他の諸原因の關係を規定すべきである。一現象は諸縁和合に依ると云ふ理由に依つて、即ち相關的であると云ふ理由に依つて、かゝる分析的努力を抛棄してはならぬ。そして又相互性の範疇が實體性、因果性の綜合であり、高次の規範であると云ふことよりして、實體、因果の兩性を看却することも錯誤の根源をなす。高次の範疇と云ふことは、範疇そのものの複合的な性質であつて、それが事件若しくは現象を解決することに向つて價值の高次性を持つと云ふのではない。寧ろ一つの

場合はこの高次の複雑性なるものは、分析能力の不完全性より来る不可解性であり、残された曖昧性であり、思想としての限界に顯はれ来る一つの謎としてさへも了解することが出来る。たゞこの高次性なるものが、最も適應的に認識される場合は、對立的認識を、質的に他のものへ轉廻せしめる場合、詳言するならば、對他的に展開してゐるものを、内面的に轉向せしめ、又悟性的に動いてゐるものを情意的に轉廻せしめ、更に又形式的概念規定として働いてゐるものを、精神の内包的自覺性に變換せしめる場合である。限定的悟性の對他關係に於ける規定として、矛盾の統一と云ふことはあり得ない。すべて統一されるものは矛盾者ではなく、又眞の矛盾とは如何なる意味に於ても統一、綜合の可能ならざるものに名づけられるべき筈だからである。

二四

有と非有とは矛盾的者である。然し有も非有もすべて人間思惟の產物であると云ふ點に於て一致點を持つてあらう。有も思惟であり、非有も思惟であると云ふ外延的包括が、必ずしも有として定立されてゐるものの實質と、非有として定立されてゐるものの實質とを融合統一するのではない。云はゞ有と非有とが同じものであると云ふことではない。恰も雌雄が共に生物であると云ふ理由に依つて、雌は雄であり、雄は雌であると云ふことが出来ないと同じやうである。

二五

又有に依るが故に非有、非有に依るが故に有なる相互關係に於ても、それらは概念學的に不離ではある。然し同じものではない。不離をやがて同一と見ることも又この種推論の誤謬である。不離の關係は二物を定立する。二物あつて不離なのである。若し同一ならば二物なく、又不離もない。このことも亦辯證的論理の彈力性より來る錯誤である。

前掲の「注意第一」に於て、カントは量と質との範疇には、相依性がないとしてゐたのである。然し *Omnis determinatio est negatio* が認められねばならぬ限り、肯定、否定の間、そして又肯定、否定の斷定から誘導される實在性、否定性の間に相依關係を認むべきであり、従つて量、質の範疇と、關係、様相の範疇の相違は「悟性の本性にその基礎を有するに相違ない」と云ふカントの考をも修正されねばならぬであらう。

二六

相關性の説明として、例へば個人の性質はその屬する社會の性質に依つて限定され、又社會の性質は、それを構成してゐる個人の性質に依つて規定されると云はれてゐる。相關關係の説明としては甚だ理解的である。

かゝる個人と社會との間に存在する相關關係が我々に教へるものは小さいのではない。事實それは甚だ適切に兩者の關係を指摘してゐるからである。然しこれは同時に同意語反復に外ならぬ。多

くの場合、完全な相關關係の教へるものは、この *tautology* に過ぎないのである。

二七

學としての問題は、個人が如何なる點に於て、社會から規定されるか、又社會が如何なる點に於て個人から規定されるか。そして又かゝる相關關係の成立する種々相、並びに相關諸關係の間に如何なる與奪があるかである。存在が意識を決定し、意識が又存在を決定すると云ふ相關關係に於ても、そこに學ばねばならぬ與奪がある。*tautology* としての相關關係はこの問題に向つて何事をも寄與しないかに思はれる。

例へば人は兒童として多くを父母から、又社會から受ける。兒童が父母並びに社會に與へるものは、絶無ではないにしても甚だ乏しいのである。そしてこの兒童が父母となり、社會人となれば、受けるもの少く、與へるものが多い。この與奪は同時に行はれるのではない。これを場合に應じ、適應的に規定することに依つて相關的同意語反復の失を脱する。

又歴史の一段階に於て、一人の人と時代との間の與奪、これも嚴密に考究されるべきである。時代が英雄を作り、英雄が時代を作るも亦同意語の反復である。これらの場合、時代とは何か、英雄とは何か、そしてこれの間に成立してゐる關係を、嚴密に攻究し、それらの中に存在する實質原因たるべきものを探索すべきである。この場合適應的な分析のみが適應的な綜合を基礎付け、且つ

完成させるのである。

意識と存在との場合、又これに準せられるべきである。

ヘーゲルの相関性

二八

こゝでヘーゲルの原因と結果の同一性が考察の對象たるべきである。即ち有限の原因及びその表象に於ても、内容に關して、原因と結果との同一性が存在する。雨即ち原因と、濕即ち結果とは全く同一な存在する水であると云ふ考である。(Auch in der endlichen Ursache und deren Vorstellung ist diese Identität in Ansehung des Inhalts vorhanden ; die Regen, die Ursache, und die Nässe, die Wirkung, sind ein und dasselbe existierende Wasser.-Encyclopädie, § 153)° この場合、雨も濕氣も水であることには何の疑もない。然し因果として考察されてゐる雨と濕氣とが、共に水であると云ふことに依つて、原因は結果と同一であり、又結果は原因と同一であるとは云はれない。雨の結果として濕氣的である場合、少くともそこに時間の相違がある。即ち雨としての水が先行し、次に濕氣としての水が繼起する。原因は如何なる場合に於ても結果に先立つ。先立つものを原因と名づけるからである。既に時間の相違が存在する。従つてそれが同一であると云ふことは云はれない筈である。

かりに因果が同時であるとせよ、それは時間なき因果であつて、靜止の状態であり、一實體であつて因果の識別性を超越する。上に第一の場合として考察された實體性の範疇に歸着されるべきである。こゝに相關關係は成立しない。

二九

ウエーベルの哲學史はヘーゲルの因果相關を次の如く敘述してゐる。曰く、因果の系列は單なる無限の進行ではない。無限の進行に於ては、各の結果は新しい結果を生ずるのみである。然し事實に於て結果は原因に向つて反動する。結果乙は丙の原因であるのみならず、甲の原因である。即ち甲は乙を惹き起さなければ原因たることは出来ない筈である。甲が原因であることは乙に依つてゐるからである。故に乙は甲の結果であるのみならず、又その原因である。例へば雨は濕氣の原因であるが、濕氣は雨の原因であり、人民の性質は政體に依つて定るが、政體は又人民の性質に依つて定るが如きである。従つて自然に於ける因果の系列は無限に延びてゐる直線ではなく、出發點に歸る曲線、即ち圓であると。これは因果の相關性の理解し易き解説である。

抑も因果なる概念は不可分の一事象を、一つの立場に立つて分析するとき成立する筈のものである。不可分そのものに因果はないからである。一つのものを二つに分けて考へたのであるから、二つのものは當然不離の關係を持つ筈である。こゝに因と果との相關性が成立する。然しかやうに

して成立してゐる因と果との相關性は、因果なる概念成立の相關である。因としての事實、果としての事實の相互關係ではない。因は先行し、果は繼起する。

三〇

雨は濕氣の原因であるが、濕氣は又雨の原因であると云ふ事實は、事實に於ても、因果の相關があるではないか。

雨と濕氣とのこの關係は、事實の關係の如くであつて、實は雨なる概念と、濕氣なる概念との相關關係を説くものに外ならぬ。最初、濕氣の原因となれる雨は、一方的に濕氣の原因であり、次の結果としての雨は、又その濕氣の一方的な結果に過ぎない。月曜日の雨が火曜日の濕氣の原因となり、又この濕氣が水曜日の雨の原因となると云ふことが云はれるかも知れないとしても、火曜日の濕氣が、月曜日の雨の原因であると云ふことは、如何なる意味に於ても許されるべきではない。

すべてこれらは事實の一方的因果連續を、概念的に論理化し、論理化することに依つて時間性を切り捨て、この思辨的工作に依つて因果の相關性を定立してゐるものに過ぎない。生ける時間としての歴史が、かゝる錯誤性に富む相關論理に依つて解釋され得べきではない。歴史の回歸性と云ふやうなことは、この點からでも壞れる。

三一

相關性に依つて因果の必然性を解放し、これに依つて必然を自由に止揚しようとすることがヘーゲル辯證法の意圖である。ウエーベルの叙述に依るならばかうである。曰く、因果の相關性に依て結果に自由の性質が認められる。このことはスピノーザに於ては認められなかつた。スピノーザに依れば結果は常に原因より來る必然的のものである。然し實際はさうしたのではなく、結果はたゞ相對關係に於て結果たるのみであると。辯證的思辨の論理的彈力性はこゝに於てもその全貌を呈示してゐる。

相關々係の浮動性

三二

相互性、それはカントに於ては能動者と受動者との間の交互作用である。又それは實體性、因果性の結合として第三の辯證的綜合である。このことがカントに於ては「相互に限定し合ふ一實體の因果性」として規定されてゐる。

さてこゝで主體のない因果はない筈である。従つて一實體の因果性(*die Causalität einer Substanz*)と云ふことは辯證的意味よりしてき程重要ではない。この二つの交互作用が完全である爲には、二つの因果が不離の關係に置かれねばならぬ。能動者と受動者とは、概念分析的に云つて不離である。従つてこの交互作用が全體者に於て統括されねばならぬ。恰も一と多とが全に於て統括されるやう

に、實體と因果とが一つのものに總括され、それが全體的事であることを要求する。即ち交互の内面關係に於ては因果的變動であるが、それを總括するものは實體としての不動たるべきである。かう考へることに依つてカント自身の提示する *Dazu kommt aber noch, dass die dritte Kategorie allen haben aus der Verbindung der zweiten mit der ersten ihrer Klasse entspringt* (なほ又第三の範疇がいづれもその項の第一と第二との綜合に依つて生ずることも注意されねばならぬ) と云ふことに該當するのである。交互作用に付てこのことのカント自らの説明、即ち「相互性は相互に限定し合ふ一實體の因果性である」と云ふ説明は、やゝ適應性を失つてゐると考へられる。

約言するならば相互性は、それが完全であればあるほど、一つの實體性、又は全體性に統括されるべきである。そしてこの全體性、不動性が相互性の依止すべき根據をなすと考へられる。

三三

かくて相互性は實體性、因果性の綜合であることよりして、常に二つの動向を含む。一は實體的不動性へ、他は一方的因果推移性へ。この二つの動向を豫想し、その綜合に於て、そして又一定の限界内に於て、相依性の意味が認められる。

従つて相依性は均衡へと、そして又不均衡へとの二方向の中間に位置づけられる。このことが相依性の思辨的彈力性を含み、ある時には甚だ適應的に理解に役立ち、又ある時は甚だ歪曲的に理解

を曇らす。

三四

この結果として、相關の觀點は、一つの實體なるものを分解する。若しその實體なるものが、粗雑であり、朴素的であり、獨斷的であり、非批判的であるならば、かゝる實體の不動性を破るのには甚だ有利な思辨を含む。それはたえず固定的なもの、一義的なものを分解し、批判する能力を持つからである。

然し又それは相互變動をあまりにも固執することに依つて、不變的な何ものをも認め能はざる性質を持つに至る。そしてそれは遂に相互の見解そのものをも定立することが出来ないことに終る。

一つの思想、一つの觀點は常に一定の、或は比較的不變の規準を持たなければならぬ。それにも拘らず、一切を相關化するならば、相關性そのものさへも相關化しなければならぬ。かくて相關の觀點より成立する定立は、定立自身の根據を失ふ。それは恰も懷疑が徹底である場合、懷疑そのものも成立し得ないと同じ歸結である。

かくて一つの思想は、又實に思想體系は、何ものか基本に於て、不變的なもの、少くとも考へ得らるゝ範圍に於て最も不變的なものを持たなければならぬ。

相關性としての「空」

三五

こゝで又中觀論に於ける中道の意味が結局、相對性であると云ふツエルバツキーの考が考察されるであらう。曰く、「中道は、原始佛教にあつては唯物論 (ucchedavāda 斷見) と不滅靈魂の教義 (Sāśvatavāda 常見) との中間を行くことであつた。その積極的内容は、個別的要素の教理であつた。大乘において、この術語はその意味を變化し、相對性と同意義になつた。相對性が中道である (Relativity is the Middle path.)」(Stcherbatsky, The Conception of Buddhist Nirvāṇa. 市川白弦譯、佛教哲學概論・一四五頁)。

さて又ツエルバツキーの所謂「相對性」とは何を意味するか。曰く「我々は相對的 (relative) と云ふ言葉を、あるものは他のものとの關係を述べることに依つてのみ、それとして認められるので、この關係を除けば意味が無くなると云ふことと、同時にこの關係は、そのものが非實在的だといふ意味を含んでゐる、といふ事實を記述するために使用する以上、われわれは *Sūnya* といふ語を、これよりもまじな解釋がないので、相對的または附隨的と譯し、*Sūnyata* と云ふ語を、相對性または附隨性と譯しても差支なからう」と。(同書、一四〇頁)。こゝでは相對的存在は、存在としては確實なものではないと云ふことを意味してゐる。即ち相對關係に於て成立してゐるものは壞れ易いものであり所謂「空」なものであり、存在性、實體性の乏しいものであると云ふことを表示してゐる。

る。尙ツエルバツキーは、このことの註として次のことを附け加へてゐる。「このやうにして、相對性の概念は、アリストートル自身がメタフュジカのなかで使つてゐるやうに、廣義にとられてゐる。メタフュジカにおいてかれは、*Ad aliquid* (或るものへ)をば、明晰な範疇に屬するものとしてではなく、すべての範疇と絡み合つてゐるものとして、取扱つてゐる。しかしてかれは、相對的なものは實在せぬものだとは云はなかつたが、最も低い度の *Ens* (實體)だと述べてゐる。*Ens* がそれ自身、相對か否かの問題をかれは解決してゐない。」約言するならば、相對的存在者は、存在性に於て高次のものではないのである。

三六

中觀論の中そのものが、相對性を顯はしてゐるものであるか何うか、又空なるものが相對的な意味のものであるか何うかの考察は別の場合に譲らるべきである。こゝでは相對的、若しくは相對性に絡んで、カント及びヘーゲルの思辨と、ツエルバツキーに依つて考へられてゐる中道若しくは空の相對性との間に、一定の類似性と、又一定の相違性とを含んでゐることを分別すべきである。

三七

カントに於ても、ヘーゲルに於ても、上に考察された相對性なるものは、範疇であり、範疇としての規定である。相對性の範疇は實體性、因果性の綜合されたものであると云ふことが基本的な考

になつてゐる。そこでこの総合的な範疇は、前の二者に比して、高次のものであるか、何うか？一つの問題となる。

カントに於ても第三の綜合範疇、少くとも相對性の範疇は、實體性と因果性との二つを綜合し、統一してゐる點よりして高次であると云ふ考が成立してゐるやうである。前掲、「注意第二」に次のやうに云つてゐる。「第三の範疇が、いづれもその綱の第一と第二との結合に依つて生ずることも注意されねばならぬ……それだから第三の範疇は純粹悟性の基礎概念ではなくして派生的概念であると考へられてはならない。何となれば第三概念をうるためになされた第一概念と第二概念との結合には第一、第二の二概念に於てなされた悟性活動とは同様ならざる特殊な悟性活動を必要とするからである。」このことに依つて、第三のものが從屬的でないことは明かにされる。更に「注意第三」に於ける全體と部分との關係規定に依つて、全體性の高次性が當然認められることになるであらう。曰く「凡ての選言的判斷に於てその範圍（即ち判斷中に含まるゝ全量）は部分（下位の概念）に分れたる全體として考へられる。」實體性と因果性とは對立的である。これの綜合が相互性である。かくて對立する二つのものは、相互性の部分であり、下位である。かやうにして相互性の上位が決定される。

ヘーゲルの辯證的止揚に於て、相關性の高次性が認められねばならぬ理由は、あまりに明白とし

て省略することが出来る。

三八

次に嚆範の高次性が、それに依つて構成されてゐる存在の高次性を決定し得るかの問題である。「思惟と存在の一致」思辨論理學の標語が單純にこの問題を解決する。高次の範疇に依つて成立してゐる存在の高次性は明白である。

かくて實體としての存在、因果としての現象に比して相關現象の思辨的優位が定立されるのである。

三九

これらの考とツエルバツキーの相對性に依るもの、並びに彼の引用せるアリストテレースの相對性に依るものが、非實在的であり、又最も低い度の實體に過ぎないと云ふ考とが明確に對蹠的に對立する。一方が高次的とするものを、他方は低度のもの、若しくは非實在のものとしてゐるのである。

佛教教學に於ける相對辯證觀と、ヘーゲルの辯證思辨觀との類似が、容易に認容され、相互の論證に利用されてゐるにも拘らず、その實質に於ては全く對蹠的であることを了解する事が出来る。その類似點は、對蹠面の接觸點に外ならぬやうである。一つは複合的構成の原理として、他は複合

體解體の原理として。

四〇

この二つのものの相違をツエルバツキーは次のやうに云つてゐる。「龍樹とその西歐における一元論の同僚との主なる相違は、龍樹が論理を信じなかつた、少くとも實在そのものの本質を知るといふ究極の目的のためには信じなかつた、といふことである。ヘーゲルもブラドリーも、その論理の効力を信じてゐるやうに思はれる。かれらの論理が、もしかから自身の歸結に適用せられるならば、無用に歸するであらうことに、氣づかなかつた。龍樹はこのことを充分に自覺してゐた。それゆゑにかかれは、まづたく論理を捨て、二者無き一者、すなはち絶對な直接的直觀に向つた。」(同書、一五二頁)。恐らくこゝに提示されてゐるやうな類似性、相違性があるであらう。然しこの觀察と規定とは尙甚だ非方法的であり、學的に一定の嚴密さを持つてゐるとは思はれないのである。それは龍樹并びにヘーゲルが取扱へる論理なるものの性質が明確にされてゐないからである。即ち前に述べた對蹠性の分析が尙精密性を缺いてゐるからである。

四一

ツエルバツキーは云ふ。「ヘーゲルは、その精神現象學において常識を拒否して、われわれの經驗において、確實そのものとして知られるやうな事物を指摘し、われわれが眞に事物について知る

すべては、その『これといふこと』(thisness)であつて、その他の内容はすべて關係である、と述べることによつて、この問題を解いてゐる。これはまさに、大乘家の *tathata* (眞如)、すなはち、*suchness* (如是)の正確なる語義であり、そして相關性は、すでに見てきたやうに、*śūnyatā* (空性)といふ語の的確な意味である」と。こゝに所謂 *thisness* は、「このものは定んでこのものである」と固定する考であり、それが複合關係に於て、又相對關係に於て、かくの如く成立してゐるに過ぎないと云ふことを知らない考方である。云はゞ素朴的實在觀であり、固定的實體のみを確實者として認識しようとする獨斷的態度であるとも解釋することが出来る。

そこでヘーゲルに於ては「このもの」としての固定は低度の思想であり、相關的思辨としての自由性が高次のものであると云ふことになり、この高次性を思惟の目的とする。この高次性の拋棄は思辨自身の拋棄であり、論理そのものの否定であり、辯證法自身の否認となる。従つてヘーゲル辯證法に於て、これを否認することは、自らの自滅を證明する以外の何ものでもあり得ない。そは究竟の理想的なるものの否認だからである。従つてツエルバツキーの所謂、「ヘーゲルもブラドリーも、その論理の効力を信じてゐるやうに思はれる。かれらの論理が、もしかから自身の歸結に適用せられるならば、無用に歸するであらうことに、氣づかなかつた」と云ふ考は、あまりに思辨論理なるものを、ヘーゲルに取つて、軽く見過ぎてゐると思はれる。この論理の無用を知るならば、そ

こに何もかも残らないからである。辯證的綜合、即ち對立的なるものの綜合に依つて漸次複雑なる概念價値に高まらうとする傾向にあるものの、かゝる綜合性を拋棄せしむることは、思辨そのものを拋棄するのと同じであり、存在の理由を失ふ。たゞ單に不徹底のために、このことに想到するに到らなかつたと云ふが如き單純なものではない。これは對蹠的に反對してゐるものの對蹠面接觸の類似性に眩惑して誘導された一つの早計な斷案のやうである。

四二

このことに關して、もう一つ次の考が精査される。「我々は更に、物はそれと對照をなす他の物を明白に考慮することによつてのみ、眞に規定し得られるといふこと、この對照を拒むならば、その物はいかなる内容をも「缺く」にいたるといふこと、およびこの對立する兩者は、それとともに包攝する或るより高い統一に合一するといふことを主張するところの、この方法の豊富な適用を見るであらう。これらの事實は、相互に聯關せるものとしてのみ知られる。そして相對性の普遍的理法といふことこそ、實在なる語が正當に意味する總てである。」(同書、一五一頁)。この相關性の説明は、ヘーゲルのなものに適用されるべきではあるが、龍樹的ではない。何故ならば上掲の最初、龍樹の意味に於て、相對性が規定された場合に、「同時にこの關係は、そのものが非實在的だといふ意味を含んでゐる」と云ふ考と一致しないからである。更に要約するならばこゝに擧げられた二

つの定立は全く同じものではないからである。

(一)、「相對性の普遍理法といふことこそ、實在なる語が正當に意味する總てである」

(二)、「この關係(相對關係)は、そのもの(あるもの)が非實在だといふ意味を含んでゐる」

(二)の定立は、相對關係に依る存在は、緣生なるが故に實在でないと云ふことを提示してゐる。

(一)の定立は、一つの物は他物との對立に於て了解され、この對立が高次のものに統一されることに於て、實在であると云ふことを提示してゐる。

共に相對に關係するのであるが、一つは相對關係なるが故に非實在であるとし、他は相對なるが故に、そしてそれが統一されるが故に、實在であると云ふことに歸着する。従つてこの二つの定立は殆んど對蹠的な相違を持つてゐる。それにも拘らずこれは類似として取上げられてゐる。

この見解に關する一つの疑問は、一は相對關係に依つて成立するものの非實在性、他はものはすべて相對性に依つて成立すると云ふ普遍的原理の實在性を定立するのであるから、對蹠的相違はないでないかと云ふ考方である。

この普遍的原理は、然しながら、龍樹に於ては、現象的なもの、感覺的なもの、即ち緣生界一般の原理ではあるが、緣生以外のものに適用することは出来ない。それは四諦の中苦集二諦に關係し、苦の理由を明らかにするものである。ツエルバツキーの「原始佛教の絶對が、相對的である

と斷定される運命からのがれ得なかつたと同じく、まさにその如く相對性そのものもまた相對的であつた」(同書、一四三頁) も同じやうに、相對性の原理が眞の實在でないことを承認してゐるのである。然しヘーゲルに於ては、より複合的な、より高次のなる概念價值構成の原理である。この點に於て兩者は全く相容れない性質である。

相關の理そのものの性質並びに系統的地位に關しては後に考察されるであらう。

相關性の根源に於ける不動性

四三

「相對性そのものもまた相對的であつた。それは明かにその反對物、非相對的者に依存し、この對照なくんば、おそらく凡ゆる意味を失ふであらう」と云ふ相對性そのものの根據付けは、相對觀そのものの終局に向つて一つの轉回點を與へてゐるのである。非相對的なものとは結局、全體的なものであり、總括的なものであり、全一的實體的なものでなければならぬからである。「諸佛は一切の人爲的な構想の相對性をさとることがそれを脱することの唯一の道であると教へられた。併しその時ひとが、この相對性の概念にとらはれるならば、却つて度し難きものとなる。」又「大聖說空法、爲離諸見故、若復見有空、諸佛所不化」もこれに對應し、結局相對理法そのものの實在を否定することになるであらう。そしてそれは結局無所得の全一に到着しなければならぬとを提示する。

中觀論開卷の歸敬偈、「能説是因縁、善滅諸戲論」より云ふも、縁生の理法を説くのは諸戲論掃蕩の爲に外ならぬ。英譯は *The Principle of (universal) Relativity, 'Tis like blissful (Nirvāṇa), Quiescence of Plurality*. である。それは雜多性、多様性、對立性の終結を意味し、そして眞の全一者を標示してゐる。キース、ワレザーなど、龍樹を否定主義にとゞまるものとする考に對し、「それはたゞ龍樹の眞の目的、かれの否定主義の積極的な半面、*dharma-kāya* (法身) と *brahma* (梵) との同一が、氏等の注意から逸脱したにすぎないと云ふツエルバツキーの敘述もこのことに關聯する。梵と法身との同一と云ふが如きは別の研究に譲るべきであるが、少くとも相對性の基根に全一不動の一者、對立性を終結せしむるものがなければならぬ筈である。

四四

然しこれに反して、ヘーゲルに於ては相關性が、一方的な因果の必然を解放することに依つて自由を獲得し、このことに依つて、存在と實質とを綜合する第三段階、概念を誘導する。云はゞ相關性はこの點に於て更に複合的なものへの媒介的任務を持つに過ぎないのである。

四五

かやうにして相關性は、一つの極限に於ては不動の實體化となり、他の極限に於て移動的な因果化となり、その中間に於て、ある度の移動性と、ある度の固定性とを實現する。

三脚はその一脚を失ふことに依つて倒れる。又各脚の均衡を失ふ時に動き出す。そこで三の場合が區別される。(一)三脚が均衡的である場合、これは静止であり、不動であり、全一であり、極限に於て三脚の區別もない程の一實體である。(二)均衡が相互の間に於て動揺し、相互に力の與奪がある場合、この場合に於ては三の力が識別され、對立化し、たえず動きながら尙そこに一定の均衡を維持する。少くとも倒れて了ふまでには到らない。これが相關性なるものの本質に相當する。

(三)均衡が全く破れて倒れて了ふ場合、これは一方的因果に於て終結するのである。相關としての問題は、第二の場合の力の與奪である。これは各の力の動きを一方的因果に分析し、それら諸力の關係し合ふ状態を量的に測定することになるであらう。これら諸力の各の關係を分析せず、たゞ總括的に、複合状態を直觀すると云ふことは、理性としては不可能である。そしてこれら諸力の交錯は、時間的にも分析されるべきである。若し相關性に時間なく、同時的であり、均衡そのものであるならば、それは一實體であり、相關性としての本質を失墜するからである。

四六

三脚は一脚を失ふことに依つて倒れる。然し四脚は一脚を失ふことに依つて必ずしも倒れない。更に六脚、八脚、數十脚、數百脚を想定するならば、その一脚を失ふとしてもそれは何の移動も生じない。さうした場合、この一脚なるものは、全體に取つての一屬性に過ぎない。そしてその全體

が實に實體であり、不動である。これらの多脚體の脚を順次取り去るとする。そしてそれがその多脚體を動搖させるとする。即ち不動の一者として成立し得ないであらう限界點に到着するとする。この場合、不動性を、即ち實體性を維持するに足る數個の脚が、この實體不動の實質原因であると考へることが出来るであらう。

生物體として私の肉體は甚だ複合的である。その何れの部分を失ふも完全ではないであらう。然し部分に依つて、それを失つても肉體全部の崩壊とならないものと、又部分に依つて、全體を崩壊さすものとが區別される。頭髮は肉體の部分である。然しこれを失ふことが必ずしも全體を崩壊させるものではない。かゝるものは必然的な要素でなく、寧ろ偶然的要素であると云つて差支ない。然し心臓はさうでない。その破壊は直接に全體の崩壊を來す。かうしたものが實質原因である。多數因果の複合に依つて成立する、云はゞ相關體を學的に考察するにあつて、かゝる實質的な因果を發見し、規定し、このものを中心として諸因果の關係を決定することは、就中實踐的に最も要請的である。相關の *tautology* を脱却することも亦この方法に依らなければならぬであらう。

四七

これらの觀察は畢竟相關性も亦相關以外に何かの所依を認めねばならぬと云ふことに歸着される。相關性は、何處かに全體性、實體性を持たねばならぬと云ふことも、その顯はれの一つである。

然しこのことを更に究明するならば、相關性は、相關以外に何ものか自存の一者を持たねばならぬと云ふ考へと進められる。云はゞアルキメデスの要求した一點を何處かに認めねば、相關的同意語反復を脱し得る支點はないからである。

四八

中觀論、觀因緣品は自性を否定する。自性は自己存在若しくは自存の意味を有するものとして差支ないのである。曰く、「如諸法自性、不在於緣中、以無自性故、他性亦復無」(諸法の自性の如きは、緣中に在らず、自性無きを以ての故、他性も亦また無し)であり、これの英譯は、*In these conditions we can find No self-existence of the entities. Where self-existence is deficient, Relational existence also lacks.* である。即ち「これらの條件中に於て、我等は諸實在物の自存を見出し得ない。自存の缺けたところには、相關的存在もまた缺ける」である。

自存の無いところには相關もない。若し空が相關の理であるならば、自存なきところには空もないのである。かりに緣生を眞理とするならば、これが相關である限り、これを眞理として成立せしむる根據が必要な筈である。然し自存者若しくは自性はない。従つて相關の理もなく、空も亦成ぜないであらう。「空病亦空」もこのことより誘導されるのである。

對立性、固定性、更に實踐的に考へられて固執性を破ることに向つてこの否定性、流動化性は意

味を持つ。然しこの否定が、單純に否定の一面のみを進むならば、限りなき否定の連續に終る。例へば「空病亦空」は更にこの空をも空とし、更にその空をも空としなければならぬ。何ごとか立することありとするならば常に必ずそれは空とされねばならぬ。かくてそれは思想そのものの無底洞に外ならぬ。これを脱する爲には、何處かに於て、自存的なるものを定立しなければならぬ。何の定立もないところには、空であるとする一つの定立も意味を持たぬのであるから。

徹底的な懷疑論は、懷疑そのものにも懷疑し、結局何ごとの定立をも失ふ。それと同じ關係が否定作用、並びに相關作用に伴ふ。否定を成立させる爲には、否定成立の根據がなければならぬ。又相關性の成立する爲には、相關關係そのものを正しと許し得る論理的根據が要求されるのである。この根據なくして相關性は、相關の確實であることの根據を失ふ。かやうにして自存者、又は自性なるもの、約言するならば、全思想、全精神活動の基體となるに堪へ得る何ものかの成立を認めなければならぬ。自性の否定は、縁生のもの、現象的なもの、更に執着の對象たるが故にのみ承認されるのである。

四九

辯證思辨は絶えざる移動である。然しこの移動が正しいとされる基本的標準は常に不動なものとして、全移動を支持しなければならぬ。云はゞ自明、自證のものが是認の場合、常にその根柢を確

保しなければならぬであらう。これは「萬法流轉」の現象中に於ける一格律を意味するのではなく、「萬法は流轉」すと云ふ定立が「正しいのである」、「確定的である」と云ふ自證性を意味するのである。格調の有無の如きは、次の段階に於ける問題である。ヘーゲル辯證法に於いても、正反合の一つの格調が實在するか何うかの問題ではなく、一つの定立、一つの判斷が成立し、それが正しいとされる根據である。例へば「純有は始源である」の判斷が、正しいとされ、正しいと理解される根據として、自明の、疑ひ得られざる明瞭確實なものがある筈である。この確實性は終局に於て、自存的であり、自證的であり、一切是認の場合に於ける根據であると云ふに歸する。

相關性と依屬性との系統的解釋

五〇

すべて相關的解釋が同意語反復性を脱する爲には、全一なるもの、實存不動的なものを所依としなければならぬ。この不動的者は全思想體系に一貫して不動なものでなければならぬ。それが相關者の所依であるからと云つて、相關的者と相關の關係に置かれることは誤謬であり、實に相關的思辨に絡む多くの重大なる論過の根源となるのである。それは全思想を浮動化し、全存在を一時的偶然化し、確實なる存在とそれの理法とを液化させる。それが實踐化される場合には單純な機會主義をさへ誘導する。すべて固定的な真理と原則とがないからである。

五一

知識なるものが如何にして成立するか、又系統なるものが如何なる根據に依つて構成され得るか、そして又それらが如何にして實踐の基礎たり得るかの根本問題に關し、起信論義記立義分の、起動、不起、二門の關係が引用されるべきである。曰く、

問。眞如是不起門。但示於體者。生滅是起動門。應唯示於相用。

答。眞如是不起門。不起不必由起立。由無有起故。所以唯示體。生滅是起動門。起必賴不起。

起含不起故。起中具三大。

起信論は眞如門に體を標示し、生滅門に體相用の三大として重ねて體を示す。云はゞ體の重複である。生滅門の體大を略し、眞如門の體と生滅門の相用とに依つて系統が組織されるのではないかと云ふのが問の意味である。然し答はこれを否定してゐる。眞如は不起門であるが、不起のものは必ずしも起に依つて成立するのではない。即ち不起は起動との相關關係に於て存在するのではない。起動なくとも不起は成立するのであるから、たゞ體の一つを標示するのみである。然し生滅は起動門である。起動するものは必ず不起のものに依屬しなければならぬ。起動するもの自身の内には、不起のものを含んではゐない。従つて起動中に於て相用と對立する體を標示しなければならぬと云ふのが答の趣旨である。こゝに體系なるもの、知識なるものの必然的な意味が含まれてゐると

考へられる。即ち相關性に於ける知識と、一方的依屬的な知識と、更に絶對的と呼ばれ得るであらう基本的知識との區別、並びに關係が否まれてゐるのである。

五二

三大としての體は相並びに用に對立し、且つ相關的である。體なるが故に相、用に對峙し、又相用なるが故に體に對峙し、そして又そこに相關の結合を含んでゐる。然し不起の體は、全一の體なるが故に對立すべき何ものもない。たゞ單に一者である。相關的移動を離脱し、不起、不動、不可分としてエレアの全一であり、有である。この確實不動性に依つて一切の所依となる。所依である限り、それは能依と對立するのではないかと考へられる。然し能依は自存性がないので所依を要求するが、所依たるものは、能依なくとも、自體の自存性を有する。柱は土臺の上に建てられる。然し土臺が柱の上に立つのではない。土臺は又礎石の上に置かれる。然し土臺なくば礎石が存在し得ない理由はない。礎石は又大地の上に置かれる。然し大地は礎石を己が存在の理由とはしない。これが單純に依屬關係である。不起門と起動門との間は依屬關係であつて相關關係ではない。

然し又、土臺は柱等に對峙し相關して土臺の義が成立するのではないか。礎石は土臺、柱等に關聯して礎石と呼ばれるのではないか。大地はその上に置かれる一切のものに對して大地の意味が成立するではないか。柱を離れて土臺の義成ぜず、土臺等を離れて礎石の義は成じないのではないか。

云はゞ相關の理由に依つてのみそれらの義が成立するのではないか。従つてそれは依屬關係であるとは斷定されないではないか。かゝる一團の思想群が成立する筈である。

この思想群は、然しながら、すべて概念分析の所産である。又名字の上の詮義である。概念は實在へのある指標ではあるが實在そのものではない。その概念の分析が直接に實在そのものを全面的に、又實質的に了解し得ないことも亦止むを得ない。もとより指標としての意味を持つ限り、このことの分析も一定の限界内に於て必然性を持つ。然し限界を越えて適用されることは錯誤の根源をなす。親子は相對の概念である。子を離れて親の義成ぜず、親を離れて子の義は成じない。正に分離一對の概念である。親子の概念が同時に存在すると云ふ理由に依つて、親と名づけられてゐる存在者が、子と同時に生れ出たのではない。親なる名は持たず、又親子の相關性は持たなかつたにしても、親なる實體の存在は子の出産に先き立つ。子の存在は親の存在に依屬する。「子は親から生れる」と云ふことは存在としては正しい事實である。然し概念的には親子は相關である。親の成立は子の成立と同時にである。かくて、表現の興味に於て「親が子を生み、子が親を生む」と云ふことが出来る。それは理に於ては必然であるが、事實として「子が親を生む」のではない。概念分析が事實に適用される場合、相關的觀點が、往々この逆説を純朴な事實に向つて強要する。

起信義記に於ける起、不起の關係と同じものをプローチノスのエネアツドに求めることが出来る。「實に一者は、他の諸の實質の外部にある。更に一者はそれら實質の一つとして考へられない程に、それらを超越する。何故ならば、他の諸の實質が存在するのは、一者に依るからである。」(Works of Plotinos, p.896)。一者は多くの諸の實質に超越し、且つそれが根柢をなす。従つてそれは多くのものゝ根柢ではあるが、多くのものゝ一つとしては計へられない。若しそれらの一つであるならばもはや根柢ではないからである。それは對立、相關を離れて、その根柢をなす。恰も不起が起動を離れてゐるにもかゝはらず、その根據となり、「不起は必ずしも起に由つて立せざる」關係と同じである。

然しかやうにしてこの考は超越論の一切の弱點を具へることに終るのではないか。必ずしもさうではない。空間は諸形象の實質的な原因である。これを離れて諸形象は成立しない。しかも空間そのものは形象の何れでもない。かう考へることに依つて、これは最もよく内在論的な性質を具備するのである。幾何學の定理は公理を離れては存在しない。然し公理は定理の一つではなく、より基本的な確實性を支持する。それが定理の構成に使用されるとされないと拘らず、存在の理由と確實さとを實現してゐる。そしてそれがかゝる推理の基本となる。こゝに原理の自存性があり、又演繹されたるものの依屬性が成立するのである。

五四

依屬性に於て、又因果性に於て、すべての現象を追求するとき、そこに自己存在、自己原因なるものを定立しなければならぬ。然し自己存在、自己原因は依屬性並びに因果性の消滅であり、又實に自滅である。因果性並びに依屬性はこの自滅に堪へ得るであらうか。

これは依屬關係、因果關係の限界點に於て認められねばならぬ一つの存在である。すべての證明が最後に自證のものを持つてゐなければ成立しないやうに、思想そのものの必然として、自證的なもの、自存的なるもの、自因的なものが要求されるであらう。それは一切依屬的な證明法を超越する。そしてそれは甚だ幽玄なる不可解の實體とも見られるけれども、又甚だ直接的な自明の實感としても定立される。疑ひ得られずとして自證されるもの、それは意識に取つての超越體ではなく、最も直接的な自認の確實者である。かゝる確實性を離れて畢竟如何なる論證も成立し得ないからである。定理の基礎付けとして公理が承認され、更に公理の自證性が了解されるならば、依屬性、並びに因果性の限界に於ける自存と自因とを了解することは困難ではない筈である。

五五

相關的解釋は自存者と依屬者との間に於ける間隙を、相關性に依つて結合させようとする一つの企てであるとも考へられる。然し相關性そのものを明瞭なる事實であるとする爲には、それを疑ひ

得られざるものとしてゐる自明の理が要求されるべきである。これを認むることは、やがて自存、自因のものの存在を認むることであり、これなくば相關性そのものの確實性さへも成就しない。従つて相關性に依つて現象と實體、相對と絶對、有限と無限との關係を決定することも、一定の領域内に於て承認されるだけのものであつて、基本的ではない。

五六

自然現象に於ても、歴史現象に於ても、實踐的諸過程に於ても、相關的解釋は、獨斷的固定性を批判し得る一つの方向を持つ。それと共にそれは同意語反復に終り、思想としての任務を果さず、理論的には回歸循環の徑路を繰返して、認識を難解の迷霧に鎖す。その歸結として、單純なる常識的機會主義の結論と選ばない論過を孕んでゐる。一方的因果性に依つて相關現象を分析し、多くの因果の交錯並びにその間の與奪を識別し、詳細にその歸趨を規定することは、學的省察に於て甚だ願はしき方法であると云ふことが出來るであらう。